日本障害者雇用促進協会 発行
「働く広場」1989.7 No73

●筆者紹介／おぎわらまどか
東京教育大学卒、東京大学大学院修士課程を経て東京教育大学大学院博士課程修了。筑波大、群馬大等講師を歴任、現在東京国際大学教授、論理学、科学哲学専攻。

随想

心についての六章 その①

荻原 欒

「心の時代である」などと簡単に言われる。まるで「もの」の方の問題はすべて解決してしまったかのようである。あるいは逆に「もの」の方が行き詰まったので心が呼び出されるのかもしれない。

しかし「心」の時代といってもはなはだ多義である。人間だれしも心をもち、自分がいちばん親しんでいると思っているものだから、心というと、各々の思い入れのもとにいろいろなことを考えるのである。

それでも、なぜ「心の時代」かといえば、次の四つぐらいにまとめられよう。

第一は、やはり「もの」の原理だけでは解決できない問題が出てきたことである。核でも環境保護でも、物質以外の原理でコントロールしなければならなくなってきたようにみえる。心に由来するより大きな秩序が必要というわけである。

第二は、人間が働きすぎになっていることである。働くことはなんと言っても、外からの強制である。働くとは、家族、会社、その他諸々のために、自分の自由を制限することである。そこで時には、強制されずに活動してみたくなる。のびのびと、時間や、目的にとらわれずに、趣味でもいい、ボランティアでもいい、とにかく自由に、自分の意志でというのである。自由は心の特性である。

第三は、人間自身の根本問題がまだ解けていないことである。生とは何か。ただバタバタ動きまわっているだけが生ではなかろう。死とは何か。例えば自分が死んで消えた後、廻りの物も人もこれまでと変わらず、存在し続けるだろうというのは、不思議でもあり、なんだか損をしたような納得いかないことでもある。これらについては一度じっくりと考えておかなければならない。考えるのは心の働きである。

第四は、今日の競争社会では、つまるところ自分の利益が最優先である。もともとは自分が生きていくためにやむを得ずのことであったろうが、今ではそれが人にとっての当然とされて疑われない。そこで失われたのは他人への思いやり、やさしさである。これを取り戻さなければならない。心の回復である。

ものを越えた新しい秩序、自由、生死の問題の解決、思いやり、どれをとってもなかなか実現しがたいことばかりである。「もの」にだけまかせていたのではだめである。そこで心の登場となる。心の問題として、心さえきちんと把握すれば、心の世界の中では、うまく解けるはずだと期待されるのである。しかし、そんなに都合よくいくものだろうか。

そこで再度、心とは何かである。

よく知られた禅宗のエピソードであるが、開祖達磨のところへ後に二祖になる慧可が来て、「心の問題を解決したいのですが、教えてください」といった。その時達磨の答えは「教えてやるから心をここにもってこい」であった。慧可はあわてて心をさがしたがどこにも見つけられなかった。そこでハタと気づいたというのである。解釈を加えれば、心などもともとないのだ、だから心の問題もない。心があるように見えるのは、いわばでっち上げで、でっち上げられた心に踊らされてすべての悩みは始まるのだとなる。そこでは心は悩みの救い主ではなくて、元凶である。

ここ何回かにわたって、少し常識に逆らって、こんな観点から心をみてみたい。変な精神主義に踊らされて失敗した近い歴史を繰り返さないためにもである。

日本障害者雇用促進協会 発行
「働く広場」1989.8 No74.

●筆者紹介／おぎわらまどか
東京教育大学卒、東京大学大学院修士課程を経て東京教育大学大学院博士課程修了。筑波大、群馬大等講師を歴任、現在東京国際大学教授、論理学、科学哲学専攻。

随想

心についての六章 その②

荻原 欒

自分とは何なのだろうか。

変な言い方だが、我々はふつう自分の行いは全部自分の行いだと思っている。ボランティア活動に参加する。参加するのは自分の意志によってであり、活動しているのは自分以外のなにものでもない。いい映画を見て感動して泣く。感動しているのも泣いているのももとより自分である。こんなことは当たり前にみえるが、しかし本当にそうなのだろうか。

アメリカの一般意味論と呼ばれる分野の推進者、S.I.ハヤカワは、次のようなことを言っている。

人は周りのいろいろなものごとを、これは花であるとか、この行いは正義であるとか、それぞれ名前をつけて呼んでいる。つまり現地に対して地図があるように、ものごとを言葉で表わし、記号化してそれに頼って生活している。同じように人は自分自身にも名前をつける。私はサラリーマンであるとか、よい父親であるとかである。自分による自分の記号化、つまり自分の地図、自己像であるが、これを「記号的自己」ということにする。

ハヤカワは、人間以外の生物は個体つまり自己の保持を原理として生きるが、人間だけは、自己ではなく記号的自己の保持、高揚をめざす生物であるという。例えば、自分を勇敢な男と名づけたとする。すると勇敢な男という記号的自己を保持するために、たとえ個体としては滅びても、勇敢に銃弾の中に飛び込んでいく。また自分をおしゃれなレディであるとすると、その保持のためには、食費を切り詰めても服装に多額の金を費やすのである。つまり人は他の動物とちがって、まず記号的自己という、自己の像を作る。そしてその後はそれに合うように、それ「らしく」を原理として行動するのである。人の行動の主役は自己ではなく、記号的自己の方である。

とすれば先のボランティア活動をさせたのは奉仕的な自分という記号的自己であり、感動して泣いているのは美しいものに敏感であるという自己像であったともいえる。実際考えてみると我々の生活は自分の意志よりも、この「らしく」に支配されて行われている面が多い。学生は学生らしく、主婦は主婦らしく、課長は課長らしく振舞うのである。そうしないと自分自身何か腑に落ちない感じがするし、そればかりでなく周囲の者もそのように振舞うことを強制してくるのである。我々の生活はいろいろな「らしく」の、つまり記号的自己の集まり、ぶつかり合いである。そこでは本物の自己はわき役である。

しかし記号的自己は自己という現地に対するあくまでも地図であった。だから本物ではなく作られたものである。作られた世界の上で、「らしく」という演技をしているのが我々の生活である。本来の自己と記号的自己の二つの間にズレのない間はそれでいいのだが、いつかはくいちがいが生ずる。有能で、勤勉なサラリーマンが定年になるとなす事なくボンヤリしてしまう、受験に際してはあれほど厳しく自己を発揮していた学生が、大学に入るとフヌケになるなどと言うのはこれである。活動していたのは記号的自己の方であった。記号的自己を生きているとそれが作りものと分かったとき何もできなくなるのである。

そうだとすれば、我々は記号的自己に従った「らしく」の演技を捨て、本来の自己に目覚めなければならない。

しかしこれは平凡すぎる結論である。ことはその通りとしても、そこには本来の自己とは何かという疑問がもう一つ残るのである。

日本障害者雇用促進協会発行
「働く広場」1989.9. No.75

随想

心についての六章 その③

荻原 欒

我々は、自分の日々の生活、自分の一生の主役はもちろん自分自らであると思っている。しかし現実の実際をよく観察してみると、そこには本当の自分なるものは見あたらず、自分だと思っているのは記号的自己とでも呼ばれるべき、自分が作った自分に対する像、イメージに過ぎないことが分かる。我々はそれが本当の自己でないことを知らずに、作られた架空の自己の保持、高揚に日々あくせくしているのである。前回はこんなことを述べた。

自分の生活、一生が自分のものでないとはまことに空しい。

とすれば、なすべきことはこの架空の自己の架空であることを見抜き、そして否定し、本来の自己を取り戻すことである。作られた自己でなく、真実の心、本心に従って生きることである。本来の自己、真実の心が自覚され、それにしたがって行動できれば、万事うまくいきそうである。残された問題はどのようにして真実の自分を取り戻すかという技術だけになる（テニスをするか、音楽を聞くか）。「失われた心の回復」などの標語の中にはこんな意味が含まれているように思われる。

しかし本来の自己、真実の心とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。

禅は仏教の中でもとくに直截に自己のあり方、心のあり方を議論しているものだと思うが、初期の禅宗のエピソードに、五祖弘忍が自分の後継ぎを決めるために弟子をテストをしたというのがある。本命であった神秀はまず次のような意味の答案を書いた。「我々は迷って、架空の自己、あるいは作られた心に従って生活しているが、そのことに気づきそれを否定できれば、明鏡にも似た、本来の清浄な心がそこにあらわれる。我々のすべきはその心を保持し、日々その塵を払ってくもらせないことである」。これに対して無名の飯炊きの僧、六祖慧能は「もともと心などはない。だから心の自覚もないし、払うべき塵もない」とした。そしてこちらが認められたのである。つまり現実の自己、現実の心が本来のものでないからといって、しかし本来の自己、本来の心もまたあるわけではないというのである。

ここでは二つのものが否定されている。一つは記号的自己のような作られた、本来的でない自己あるいは心。もう一つは作られたものでない、本来の、真実なものである自己あるいは心である。

あるものがほんものでないことをいうには、もう一方を立ててそちらの方がほんものであることを言えばよい。ただしこの論法は、新たに立てたもう一方のほんものを保証する手段がある場合に限って有効である。もの（物体）についてはそのほんものであることの確認は比較的しやすい。ものだから目に見えるのである。しかし自己とか心については、その確認が至難である。目で見えないからである。そのことが逆手に取られて、精神的なものがからむ問題についての議論では、自己過信的で強引な方が、大きい声で言い張る方が、勝ったりする。精神主義の独りよがりで危険な点がここにある。あるもののニセものであることを言うのに他のもののほんものであることを示すというこの方式は、心の場合はうまくいかないのである。

ここのところが難しい。禅でよく無心という。すると誤解する者は、無心を主張しながら、そこに無心という心を立ててしまうのである。否定は徹底しなければいけない。

しかし作られた自己もダメ、本来の自己もダメとなれば、それではどうすればよいのか。

日本障害者雇用促進協会
「働く広場」1989.12 No.76.

随想

心についての六章 その④

荻原 欒

心は、遅れてやってくるものではないだろうか。

そうであるのに、我々は、心を最初からあるものとしてとらえてしまう。後からきたものを先からあるように思うとすれば、それは、錯覚か、思い込みかのどちらかである。

恋人と別れて悲しいとする。我々はすぐ、自分の心があって、その心が悲しむのだと考える。しかし本当にそうだろうか。事態をよく見てみれば、先入主を捨てただ見るだけに徹すれば、現実にそこにあるのは去っていく恋人とそれを見送る自分だけである。他には何もない。いくら捜しても、悲しさも、悲しむ心も見つからないのである。

しかし、見つからないからといって、存在しないとするのはおかしいと言われるかもしれない。そのときは、次のことを考えてみたい。心はあっても、去っていく恋人と見送る自分という事実に何の影響も与えないことである。心があったとしても、なかったとしても、そこにあるのは依然として事実だけで、事柄は少しも変わらない。つまり心の存在は事柄のありように少しも利いていないのである。利いていないものは、それにとって存在しないものだと言えないだろうか。産んだだけで育てなかった親のようにである。もっとも、こう割り切れるかどうかがこの問題の分かれ目である。

もう一つ例をあげよう。この町を去る決心をしたとする。そこにあるのは町を去るという、決心の内容だけである。決心あるいは決心する心は余剰である。我々は通常、決心は心がするものだと決めつけて、(決心する)心を(決心した)事柄の前におく。しかし、決心した内容を離れて決心する心はありえず、決心する心があってもなくても決心の内容に変わりはないとすれば、やはり決心あるいは決心する心は余分なのである。

心は後からやってくる。心はすべてが終わった後でそこに割り込んできて、最初からいたような顔をするのである。遅れてくるとはこのことである。

それなのに我々は、心を先からあるものとして、固定化してとらえる。そしてその内容も、事実を越えて、どんどん膨らませてしまう。例えば、すべてのものより先にあって、時間を通して変わることのない、唯一の心があるとして、次のように言われたりする。心変わりしてはいけない、心に背いてはいけない、時代は変わっても心は変わらない、時代の心、民族の心等々。

さらに悪いことに人は、そうした心を、眼の前の現実よりも大切にする。もし二つが食い違ったりすれば、事柄に逆らって、現実の方を、心に合わせようとする。そして無理をして、できないことを悩むのである。

自分とか自己についてもそうである。例えば何か失敗をする。よく見てみれば、そこには失敗する自分はなくて、あるのはただ失敗した事柄だけである。あるのは単に、ぬかるみに滑ってころんだこと、投函すべきハガキをまだポケットに持っていること、それだけなのである。それを自分があって失敗するとするから、自分はいつもヘマをする愚か者として固定されて、さらに余計な内容まで付け加わって膨らんで、「どうしようもない私がそこにいる」というようなことになってしまう。

実は、心も自分も、裸の王様のあの衣装ではないのか。本当はそこにないのに、ないとは誰も言いにくいのである。

(東京国際大学教授)

随想

心についての六章 その⑤

荻原 樂

人間は日々、どのような態度で生きるのが最も望ましいのだろうか。前に、言及したことのある一般意味論のS・I・ハヤカワは、心理学者のC・ロジャーズ、A・マズロウを参照しながら、次の三つの項目を上げている。私の解釈も加えて紹介してみよう。

①自分を取り巻く環境、社会に必ずしも順応していないが、かといってかたくなに反抗もしていない。ややもすると、行政者(お上)や教師(先生)は、環境への適応、つまり社会や周囲の目指すものに各自の目標を一致させることが人間の幸せであると説く。しかし無理して合わせればゆがみもできるし、また新しいものは何も出てこないのである。そこで「社会の一部ではあるが、社会のとりこになっていない」、あるいはマズロウの言う「この慣例に従う態度は、彼の肩に軽くかかっていて、簡単に脱ぎ捨てられる外套のようなものである」という生き方が望ましいものとなる。「とらわれない」ということである。

②自分の経験を自ら素直に受け入れる。自分にとって都合の悪い感情でもすべて認知できることである。大人であるのに何かを恐がった、ひそかにずるいことをした、そういった時、そういう自分は認めたくないものである。見なかったふりをしたり、うまい言いわけを考えて、なかったことにするのである。認めてしまうと、それまで抱いていた自己のイメージを改変しなければならなくなる。かたくなさに対して、「素直」ということである。

③未知のもの、あいまいなものを嫌がらず、恐れない。通常、未知、あいまいはマイナスの価値を持つ。したがってそれらに対しては、無視したり、否定したり、簡単に割り切って既知のものにして安心したりする。しかし我々の周辺は、未知、あいまいさに満ちているし、それを取り去ることは不可能である。既知のことがらは、未知の大海の片隅の泡の一つかみにすぎない。未知、あいまいさの承認、つまり人間が自由にできない領域の承認、これは「謙虚」ということである。

確かに、とらわれなく、素直に、謙虚に生きることができたら、我々の人生はよほど軽快なものになるだろう。だがこれが難しい。そして実は、この難しさの原因は、心への誤解、心への気兼ねにあるのではないだろうか。心の存在とこの三者は相いれないのである。

まず心ととらわれのなさは両立しない。通常、人が何か行うのは心に従ってであると考えられている。心は人の行動に対して司令である。司令による命令が、上着を脱ぎ、そしてまた着るような気楽なものであってはまずい。

さらに、心は素直さとも両立しない。心は完結した全体であるとされている。素直さに従って、自分を否定するような新たな経験を受け入れることは、心を改変することになる。完全なものに改変はおかしい。

未知を認めることは心の否定である。なぜなら、心に期待されるのは、現実には実現していないとしても、原理的には、すべてを知り、先のできごとまで見通していることである。

このようにして「心の存在」が、「とらわれのないこと、素直であること、謙虚であること」と両立せず、にもかかわらず、我々はそのように生きることを望むなら、その時、我々は心の方を捨てなければならない。逆に言えば、心を捨てれば、こうした生き方の世界が現れてくるのである。心を事前に立てずに、心に気兼ねせず、心に負い目を持たずにやれば、そういう世界が開けてくるのである。

無心とはこういうことではないのだろうか。

(東京国際大学教授)

「働く広場」1990.3. No 78

随想

心についての六章 その⑥

荻原 樂

ニワトリが先かタマゴが先かのクイズに似ているが、今、目の前のテーブルにケーキがのっているとする。当然このケーキを作った人と、その材料が別に考えられる。ケーキと、それを作った人あるいは材料と、どちらが先だろうか。通常の考え方では、作った人、材料が、ケーキより先である。

しかし、考え方はこの一方だけではない。もし、テーブルの上のケーキが先になかったとしたら、そのケーキを作った人というのをどのようにして考えるのだろうか。生涯何も作らない菓子職人というものが考えられ得るのだろうか。またケーキがないときその材料とは何なのだろうか。こう考えてみると作った人、材料はこの作られたケーキがあって初めていえることであって、ここでは、ケーキが、作った人、材料に先立つことになる。

我々は普通、何かことがらを説明するのに、それに先立つものを立て、それによってそのことがらを説明するというやり方をしている。例えば、落ちてくる石に対しては、先立つもの、つまり原因として重力をいい、将棋で、角を斜め前に動かせば、それは先立つルールに従ってであるとする。人の行動には、その前にそれを起こさせる意志があったわけだし、正しい行いに先だって、何々すべしという道徳律があるのである。

しかし、こういった考え方には難点もある。我々は、神様ではないから、まず第一に、すべてのことがらについてそれに先立つものをすべて知っているわけではないし、また知ることもできない。また第二に、我々はこの世界のできごとをゼロからすべて自分で作り出してきたわけではない。実際はすでにでき上がっていたところに投げ出され、途中から始めたに過ぎない。ケーキで言えば、ケーキのおいてあるテーブルに座ったところからことは始まるのであって、いつも自分で食べるわけではないのである。

とすれば、先立つものはたとえあったとしても、必ずしも我々の手の内にあるわけではない。したがって我々にとっては不確かな、仮定的なものに過ぎないのである。

だから有限な人間にとって大切なのは、作られた、場合によっては得体の知れない先立つものではなく、与えられていていかんともし得ない目の前の現実なのである。

話を戻して、心について言えば、心はこうした先立つものの代表格である。心の本質はこういった先立つものであることにある。

この連載は今回で終わるが、私が言いたかったのは、心という先立つものを立てて、それにしばられてそちらの方から、与えられた現実を考えるという思考法を転換して、与えられた現実の生活の中で、その中で生じたものとして心を自由に考えるというやり方をしたいということであった。

心は現実の中で、生活の中で時に応じて、後から作り出されたものである。生活のための道具である。道具だから上手に利用し、必要なくなったら使うのをやめ、別な道具に変えればよい。先からあって、唯一つとされる心にふりまわされることなく（いかに我々は心にふりまわされていることか）、心を上手に調教し、心とうまくつき合い、心を軽く遊ばせる、これが肝要なのではないか。

ややもすると、心の時代ということで自分勝手な心をたてて、それに自分がふりまわされるだけではなく、そこに他人をも巻き込まないと承知しないという風潮がある。この逆コースには用心しなければならない。

（東京国際大学教授）